

て、以下の検討を行った。対象は 100 例で、成人 83 例、小児 17 例である。関心領域設定のための画像加算時期として 1~3 分と 2~5 分の加算像を用い、得られる腎面積およびクリアランスと腎摂取率の相関性に及ぼす影響について比較検討した。また、腎摂取率を算出する場合の基準点に、データ収集開始時期と動脈相終了時期を用いた場合の相関性に及ぼす影響についても検討した。その結果、加算画像として 1~3 分を用いた場合、腎面積および回帰式の相関係数 (r) は、2~5 分を用いたそれと比較して有意に高値を示した。また、SEE についても改善されていた。一方、動脈相終了時期は、15 秒から 55 秒の広い範囲に分布し、ポーラス性やデータ開始等のばらつきの存在が示唆された。腎摂取率算出の基準点として動脈相終了時を用いた場合の相関係数および SEE は、データ収集開始時のそれと比較していずれも改善が認められた。

20. 腎シンチグラフィが有用であった腎下垂の 1 例

田邊 芳雄 周藤 裕治 遠藤 健一
西尾 剛 小川 敏英 (鳥取大・放)

症例は、60 歳、女性。長期間他院にて、高血圧にて治療中であったが、コントロール不良のため二次性高血圧の有無の精査のため当院入院となった。坐位にて施行した腎シンチグラフィでは、右腎の rotation を伴った下垂と、血流低下を認めたが、後日行った臥位での再検シンチグラフィでは、右腎は正常の形態であり、腎血流も左右差を認めなかった。起立位での右腎の下垂・rotation による腎動脈の屈曲、伸展に起因した右腎血流の低下と考えられた。血管造影は通常起立位で行うことは困難であり、腎の遊走による腎動脈の変化の評価は困難であるが、本例では、腎シンチグラフィが非侵襲的に坐位・臥位での腎の位置・形態・機能を評価することができ有用であった。